

昨年観たムラサキホコリ

淵澤 功

キノコに興味を持つようになって数年、日々里山や森を歩いている内に今まで気がつかなかった四季の移ろいや樹木、草花、野鳥、昆虫など自然界のもろもろの生き物の営みの一端を知ることができたと共にいかに今まで自然界のことに無知であったことを痛感したここ数年でした。

「巡回中」に目についてこれはなんだろうという興味から今ではキノコの外に粘菌や冬虫夏草まで興味の対象が広がりましたが、なかでも粘菌は予期しない所での遭遇とススホコリやムラサキホコリのように変化の激しいものもあり興味を惹かれます。

粘菌のムラサキホコリはマメホコリと共に目にする機会の多い変形菌ですが、昨年

は近くの森で頻繁に発生して見る機会が多かったので昨年観たムラサキホコリについて少し記してみます。

変形菌は近年菌類の扱いをされなくなったようなので会報での扱いは適当でないかもしれませんが、キノコの友達とゆうことでご容赦下さい。

ムラサキホコリの仲間は図鑑やネットによるとムラサキホコリ、サビムラサキホコリ、オオムラサキホコリ、コムラサキホコリ、スミスムラサキホコリ、サラノセムラサキホコリ等の名称が見られますが、素人の目視だけの判断ですので以下ムラサキホコリとします。

1. 二つのタイプ



写真1 16時33分撮影



写真2 17時20分撮影

発生は5月中頃から8月末まで見られましたが、6月初旬から7月末までの梅雨の期間が一番目にする機会が多く、変形体は午後に朽ち木、倒木などの上に現れました。

自分の見た範囲では二つのタイプがあり、一つは午後早い内にしっかりした粒塊状の個体を数個点在させて形成するもので、色は乳白色もしくは黄みを帯びた乳白

色また緑がかったものもありました(写真1)。もう一つは午後に変形体がまだ粘膜状で前者より遅く夕方からやや小さめの多くの粒塊状個体を形成するもので色は白に近い乳白色です(写真2)。しかしこれは種の違いによるものか、環境の違いによるものかはわかりません。



写真3 7時12分撮影



写真4 15時41分撮影



写真5 子実体形成より2日後



写真6 4時27分撮影

ムラサキホコリの変形体が現れるのは子実体を形成後、胞子を飛ばし易い気象条件を感知するのか出現した翌日の降雨例はありませんでした。変形体がこの形で現れるのはこの日だけでこの後、深夜から子実体を数時間で形成します。写真1の変形体

は翌日の朝、観察に行ったところ写真3のように束生した子実体はまだ濃茶色の未乾燥状態で胞子嚢に鬼の金棒のようなトゲが見られました。悪環境の時結束して立ち上がるための知恵でしょうか。午後には写真4のようにほぼ乾燥し赤褐色に変わり結束

の外側から孢子囊が離れつつあります。写真5はさらに2日後の子実体で好天に恵まれだぶ孢子を飛ばしたようです。半透明の子実体の中に針金状の軸柱が見えますが光沢のある黒色でかなり堅固で子囊を風になびかせ孢子を飛ばします。粘膜状の変形体から堅固な軸柱を短時間に作りあげる仕組みには驚かされます。この個体は色と形態からサビムラサキホコリではないかと思われます。

次に写真6は写真2のタイプの早朝の状態ですが、粒塊状になるのが遅かったため

子実体が完成したばかりの白色です。この子実体形成時はナメクジの好餌のようで数匹で食事に出あったこともありました。この白色状態からまもなく写真8のように孢子の成熟により小豆色を経て写真9の茶褐色に変色しました。前者に比べてこちらは子実体が群生し束生を構成する子囊の本数は少なめです。また前者のタイプほど明瞭でありませんが同じように孢子囊にイボ状突起が見られました。

翌日は写真9のように乾燥して紫がかった灰褐色になりましたが、変色の過程で赤褐色にはなりませんでした。



写真7 クローズアップ



写真8 6時46分撮影

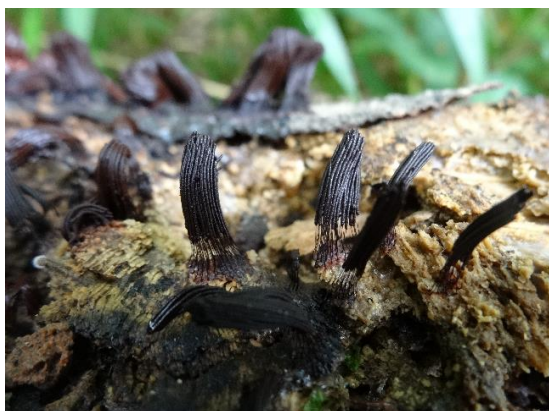


写真9 9時33分撮影



写真10 翌日8時24分撮影

2. 自宅での観察

ムラサキホコリの子実体形成は深夜に行われるので間近で観察することは困難です。私は懐中電灯を手に深夜の森に行きましたが、危険でもあるし、何より怪しい行動なのでお勧めできません。しかし暗闇の中、徐々に立ち上がる姿は興味深く懐中電灯に照らされた純白の子実体の林立は幻想的でもありました。

以前ムラサキホコリの知識がない時、森の中の「なんだろう物体」の次の日の変わりようは驚きでした。その後運よく前者のタイプの変形体を見つけた時に持ち帰って観察しようと倒木から削り取って観察を試みましたが、採取時にダメージを与えたの

か粒塊状が完成したものは家では変化しませんでした。

昨年は後者のタイプの粘膜状粘菌の一部を四回採取して観察しましたが、すべて粘菌は収れんして粒塊になり子実体を形成しました。

以下は自宅で観察した一例ですが、写真11は夕方5時50分に変形菌のごく一部を採取したもので、それまで増殖して拡大してきた粘菌が粒塊状に収れんしつつあります。その後写真12のような経過を経て午後11時に粒塊ができ上がり、3時間かけて写真14の子実体が完成しました。



写真11 18時22分撮影



写真12 18時59分撮影



写真13 23時00分撮影 立ち上がり前



写真14 2時00分撮影 立ち上がり完了

3. 泉自然公園の朽ち木、伐木集積

一昨年、千葉菌の観察会に参加し初めて行った泉自然公園は、自宅近辺の森より自然度が高く普段目にしないキノコに出会えるのでその後度々行ってますが、粘菌はムラサキホコリの外マメホコリ、ススホコリ、ツノホコリ、シロウツボホコリ、シロジクモジホコリ、ホソエノヌカホコリ、ナガハウツボホコリなどを見ることができました。

地上生のキノコでめぼしいのが見つからない時、朽ち木や伐木集積を覗いて見ると時々粘菌に出会えます。またそのような所には硬いキノコの外に材上生のカサヒダタケ、クロヒメオニタケ、ヒメスギタケ、ヒイ

ロベニヒダタケ、ヌメリツバタケ、フクロシトネタケ、コブリノマメザヤタケ、アラゲコベニチャワンタケ、ヒメロクショウグサレキンなども発生していましたので興味のある方は覗いて見て下さい。粘菌とキノコのコラボが見られます。

拙文の終わりにここ数年の森歩きで感得したことは生き物皆、「命のリレー」すべてこのひとことのために一生懸命生きているんだなとゆうことでした。振り返って自分の生涯も見えてきた今、なんの取り得もない人生だけど命のリレーだけはしているのでよしとするかと自嘲している今日この頃です。□



深夜のムラサキホコリ



泉自然公園でのコラボ

■孢子文学名作選

ISBN978-4-89629-266-4 C0093

編者：田中美穂，発行：港の人 2013. 9. 23, ¥2, 600＋税

世にあふれる膨大な書物のなかから、俳句、短歌、詩、小説などジャンルを問わずコケ、シダ、海藻、きのこにカビ、胞子をつくりだす生物を対象とした文学を集める。労することなくピンポイントで読めることに加え、装本の贅沢さがじつに味わい深い。多様かつ特殊な用紙に変化に富んだレイアウト。貴重本からの挿絵、懐かしい活版に手書き文字。穴あり箔ありエンボスに蠟引き。電子ブックでは味わえない手触りのもつ充実感。すごい、本はここまで遊べるのだ。飯沢耕太郎著『きのこ文学名作選』の姉妹版。ぜひペアで。(公)

